

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	端艇部 : 部報
Author(s)	鈴山
Citation	龍南, 248 : 128 - 130
Issue date	1941-02-25
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/8454
Right	

つとめいそしむ健氣な姿が見られるのである。私は、我々が部共同体に於て束縛に對する反抗として自由を云々する前に自己の任務に目覺すべきであると思ふ。我々は自己の使命・責任に生きる事によつて始めて無礙の自由萬物を包攝する自由が得られる。部生活の理想は實にこの點に存するものがあつて、部員が御互に切磋琢磨して、この理想を實現せんと努力精進する處に部生活の眞の意義が認められる。個人主義の立場に於ては、矛盾に出遭うて自己に反省する場合、その落所は畢竟個人の利害に外ならない。然るに我々の場合には、それは部であり、學校であり、幾多先輩の築き續けて來られた尊い傳統である。そこには、個人の個人たる點は内容的に解消して相互の間に和合が成立する。この事は我々の國家生活についても言ひ得ると思ふ。我々日本人はその本來性に於て、常にみくに(御國)を基調として行動し、それを内奥の批判原理として把持してゐる。老も若きも、男も女も、「みくにのために」を行動の基調として、各自その分を守つてつとめに精進する處に、我が國体の根本義がある。

「至誠にして動かさるもの未だこれあらざるなり」の聖句を「身を以て驗せん生死の大事は姑らく之を置く」と言つた吉田松蔭の意氣こそ「つとめ」を盡くすといふ事の眞髓であり、同時に又我々の覺悟であるべきである。

明治天皇御製

みち／＼につとめいそしむ國民の

身をすくよかにあらせてしがな

端艇部

文二甲二

鈴

山

紀元二千六百年を迎へて吾人は新しき世紀に第一歩を踏み入れた。吾人の新しく生活せんとする新世紀は、輝かしく曉鐘の命を擔ふと同時に、多難なる前途を思はしめるものがある。吾人はこゝに、この一年の無事を祈ると共に、更に緊急化しうべき事態に備へて、何時にても起つ覺悟を新にせねばならぬと思ふ。

翻つて我端艇部の現状を見るに、新生氣を以て改革すべき點多々あるを知る。吾人はこゝに、動もすれば沈滞の中に彷徨した昨今の端艇部の戦績を記して、報告の責を果さんとするものではない。新世紀の發足と、學園新体制の誕生に際し、我龍南端艇部の生氣溢るる再出發を報國團諸君の前に誓はんとするものである。

昭和十二年我端艇部が、瀬田川上に覇を唱へてより三星霜、我等は堂々の陣を以て艇を進めながら、毎年些細なる故障の發生から、四高六高の堅陣に敗れ去つた。吾

人は今更こゝに惜むべき敗績を繰返すを潔しとしない。唯無理解な動もすれば蔑視的な周圍の中にあつて、決然たる勇氣と鬪志とを以て、自己のシートを守り續けた意氣を諸士の前に記するを快とするものである。

昨年は、止むを得ざる事情による合宿の分離と、コーチャーの交替等により、思はざる敗北を喫する結果となつた。端艇部は練習の都合により水前寺附近に合宿する必要上、合宿の選定には毎年多大の困難を感ずるのである。而も昨年は適當なる合宿なく、止むを得ず合宿を二ヶ所に分離することとなつたが、之が部の結束に重大なる影響を及ぼす結果となつた。而して又コーチャーの交替は、徒らに漕法の變更を餘儀なくして、アルバイターをして完全なる漕法の味得を妨害する結果となつた。此事は實に致命的な影響を及ぼすに至つたと思ふのである。然し之は端艇部當事者の責任であつて、唯今後かゝる轍を二度と踏まざることを誓ふのみである。しかしこゝに更に考慮すべき一事がある。それはボートに對する報國團員諸士の感謝不足と、それに起因する部員の缺乏である。比較的水に恵まれぬ地方的都市といふハンデイヤップもある事故、ボートを知らぬ人々の多いことは當然のことであるが、然し一通りのスポーツ知識があれば徒らにボートに恐れをなして引込むといふことも起らぬこ

と、思ふ。諸君は五高とボートレースとを同時に想起した嘗ての頃を忘れたのだらうか。之は愚痴かも知れぬが東大や一高等がボートを以て一校を代表するスポーツとしてゐるに對し、餘りには寂寞の感に堪へない。今夏の全日本漕艇大會に一高が最輕量クルーを以て、帝大・商大・早稻田・慶應等の諸強豪を退けて、堂々優勝の榮を完了した事は何故なるか。之は体力の不足を精神で補つた所謂一高スピリットの興隆である。東西相隔ること遠しと雖も、同じく高校の門に學ぶ我々の大いに意を強うすることであるが、我々はその標榜する五高魂の興隆に於て彼に立遅れてゐるのではあるまいか。若しも然りとすれば吾人はこゝに更に憤起一番大いに努力する必要があるであらう。一高といへども、我々が精神力に於て彼に劣つてゐる筈はないではないか。

我々は先の龍南學徒報國團の結成に際して聲を大にして諸君に喚びかけた。而も効果は薄弱であつた。然れども我々は現在の少數部員を以てしても結束精進することを誓ふものである。されど江畫は廣く艇は豊富である。十人、二十人の諸君を收れても、江畫は湖面を擧めることとはしない。望むらくは諸君が六隻の艇を最大に活用され、更に許さるれば、諸君がボート道の体现のために精進されることである。

江畫の清水は汚濁を挾むには餘りにも清い。我は純粹の五高魂を以てボート道に精進することを、こゝに誓ふのである。

終り。

水泳部

理三甲二

志摩耕太郎

幾度筆をとり直しても、生々しい昨夏の敗退が私の腕を痺らせてしまふ。輝かしき龍南水泳部の傳統に未だ會てない敗慘の汚點を印したその無念さが。

古くして彌々新しと豪語する我々が過去の榮光にのみ酔ふのではないが、我が部創設の昔、私の父等は龍南の鉢巻も凜々しく長崎灣十里の遠泳に天晴れ榮冠を戴き、雄々しき河童が呱呱の聲をあげたのであり、續く先人の意氣と熱とは東都に、京洛に、力戰奮闘、よく西海に強豪龍南在りと稱呼せられて來たのである。

然して、我が苦闘史昭和十一年を緋けば、時正に我が帝國が、外に暴虐英大國反撃の機運に奔騰し、内靑少年の体育特に重んぜられ、わけても日本の特技水泳はその頂點に達するの觀があつた。是時龍南の壯氣揚りて止まず、蚪龍寔に飛雲を得たのである。剛毅山川監督を圍み村山主將以下團致一結、よく京洛に戦ひ活躍を劃にし、

勝利の大旗、魚雷大盃を戴きて、全國高校を席巻し盡くしたのである。

輝かしきこの戰蹟を記しつつも、私の耳には先輩が感激の勝鬨が新しく、美しく鳴り響いて居る。さればこそこの傳統を、と思ふにつけて、私は唯々力の足らざりしを嘆くのである。池田監督以下我々は非運に慟くのである。

後輩よ。榮光のどよめきを忘るゝなかれ、高校水上の覇者として全國に君臨せし龍南水泳部の面目は、汝等の奮起によりて益々陸離たらん。しかし拙き汝等の兄が去んぬる夏箱崎松原にて印せる汚名を雪げ、哭ける非運を覆せ。今二千六百一年の帝國が踏み出したる世紀を劃するその巨歩は創業の精神を負ひ、尊き過去の光榮に照りはえて彌々新しい。

我が部も隊伍を整へた。學徒として、水技を錬り、海國日本男兒の本領を發揮すべき準備は完了した。貫徹く傳統をしつかと握りしめ新しき第一步を、さあ踏み出せ。清水を湛へた大プールは汝等を待ち、松籟に鎮まる優勝の碑は汝等の奮闘を見守る。

行けよ。

これを以つて部報にします。

しかして是に、永きに互り常に御高訓、御激勵を忝う